

エッカーマンの『ゲーテとの会話』 あるいはゲーテの『エッカーマンとの談話』

平野篤司

1.

ニーチェは、そのアフォリズム集『人間的な、あまりに人間的なことから』のなかで、「ゲーテの書いたもの、とりわけこの世にあるドイツ語で書かれた最上の書物であるエッカーマンとの談話（Unterhaltungen）を除くと、一体繰り返し繰り返し読むに値するドイツ語の散文のなかで何が残るだろうか。』¹」と問うている。これについては考えさせられることがいくつもある。

まず、ニーチェのほかの発言に見られる性急な過激さは何えないことである。このくだりでは、かれの愛着を寄せる高い評価を与えている対象がシュテフターの長編小説であったり、ケラーの短編小説であったりするのだ。焦燥に駆られて生き急いだ感のある人生を送ったニーチェの基本的な憧れは、古典主義的なものに向けられていたのだろうと思われる。じじつかれは随所においてロマン主義、とりわけドイツロマン主義にたいしては、強い反感さえ表明してるのである。しかし、これはニーチェに特有な愛憎が半ばし、反転するという心的機制のなせるわざなのだ。この厄介な繊細な知性は、自分にとって大事なものを傷つけないにはおかないのである。これがかれ一流の愛情告白のやり方である。

だが、このゲーテに対する賛辞はどのように理解すればよいだろうか。これは、ゲーテの定式「およそロマン主義的なものは病的であり、古典主義的なものが健康的である」に素朴に則った言明であるとは思えない。ここにはかれ一流の自虐的な含みは窺えないからである。その落ち着いた調子には、精神的な余裕さえ感じられるほどである。これは、おそら

くニーチェの批評の対象が自分自身には向けられていないからだと思われる。「この人を見よ」の世界ではないのである。ゲーテに対するニーチェの距離感は、あまりにも大きかったのだといわざるを得ない。ゲーテに対するささやかなパロディーを展開するニーチェではあるが、おそらくキリストに対するよりもゲーテに対する理解と受容の方が困難な課題であったのだ。

しかし、対ゲーテのような距離感のある対象に向かう時に、ニーチェの扱い様は、余裕を感じさせ、優雅さをすらたたえるのである。かれの慧眼には注目に値するものがある。

もう一点、このニーチェの対ゲーテの賛辞には、注目すべき点がある。それは、ここで「談話」と訳した原語 *Unterhaltungen* のニュアンスの問題である。この単語は動詞の形 *unterhalten* も同様に、「保つ、支える」を原義とし、「もてなす、接待する、楽しませる」の意味の拡がりを持ち、特に名詞形においては「談話、会話、おしゃべり」、さらには「もてなし、楽しみ」ひいては「慰安、娯楽」の意で用いられる。エッカーマンの『ゲーテとの談話』は、確かにこのような幅広い豊かなニュアンスを含んだ *Unterhaltungen* という語彙にふさわしい内実と雰囲気満ちている。だが、この語彙は、ニーチェにより言い換え、あるいは記憶違いか、それとも取り違いなのである。エッカーマンの著作の表題にはこの語は使われておらず、その代り *Gespräche* という、より即物的というか冷静な語が用いられている。これは、「話し合い、語らい、対話、会談」というような意味合いを持つ。エッカーマンが使ったのは、こちらの方であって、そこには、歓談あるいは楽しい語らいというニュアンスは存在しない。しかし、実際は、まさに愉悅に満ちた幸福な語らいなのであって、ニーチェの用語のほうがふさわしい。ニーチェもその気分を十分に受け取っていたので思わずその語を用いてしまったというのが実情ではないのか。この辺りには優れた編集者が持つような直観的反應を窺わせて、生きたニーチェの息遣いを見る思いがする。悦ばしい学問ならぬ悦ばしい談話が展開されていることに深刻な哲学者ニーチェは何の

銜いもなく魅了されたのだと思う。これは、かれにとっては永遠に憧れてやまぬ彼岸の世界であったろう。

2.

ニーチェの絶賛するエッカーマンの『ゲーテとの談話』という書物の表題についてもう少し考えてみたいと思う。ゲーテの会話ないしは対話録ならばほかにもいくらでもあるが、なぜエッカーマンのものがひとときわ魅力を持っているかといえば、これほどゲーテの生きた姿を彷彿とさせるものはないからであり、エッカーマンという人物を通してのことであるが、今ここに生きているゲーテその人の肉声を聴いているかのような生々しい経験を読者がするからであろう。まさにゲーテが語っているのだという感触である。そうであるなら、この書物は、「ゲーテとの談話」というのではなく、正確には「ゲーテの談話」というべきであろう。さすがにエッカーマンは、出版にあたって表題に「私の」という主体を表す人称は付加していないが、かりに『エッカーマンのゲーテとの談話』であれば、原理的には自分の存在が抜き差しならぬものとして構造的に表れて来ざるをえなかったであろう。

エッカーマンの意図としては、ゲーテの晩年の言動を細大漏らさず、忠実に書き残すことにあったのだし、それは驚嘆すべき成果を上げているのだからその表題に拘泥する必要は格別ないのだが、敢えて言うならこれは、ゲーテの自分自身についての語り物であり、かれの作品といってもよいのである。だが、ここでよく考えなければならぬことがある。それは、ゲーテのこの作品はエッカーマンという人物がいなければ生まれることはなかったということだ。

ここで主題は、エッカーマンという書き手の存在のあり様という問題に移る。エッカーマンは、この『ゲーテとの談話』のなかで序章として自らの生い立ちについて詳らかに書いている。かれは、1792年に北ドイツのヴィンゼンという名もない寒村に生を享けている。ゲーテとはすべ

て対照的というも言うべき境涯に生きた人であった。そもそもこの点でゲーテを引き合いに出すのもおこがましいほどである。少年時代に絵画の才能を認められているが、生活の貧しさゆえにその道に進むことはできなかった。また、詩集を出してそれなりの評判をとるなど文学的創作意欲も才能もあったようである。それは筆で立つための実りというほどのものをもたらすことはなかったが、生涯彼の精神的な底流として持続していたらしい。文学に対する関心は終生続いている、これが自作の詩集をゲーテに贈呈し、それがきっかけとなってゲーテとの邂逅が生じる機縁にもなっているのである。もちろん、彼自身の意欲がエッカーマンにとって極めて重要な動機であることは疑いようもない。

しかし、考えてみれば、当時 32 歳になる田舎出の貧しい一介の文学愛好者が、近代ヨーロッパの文学世界でオリンポスの頂に聳え立っていたともいわれる大巨匠、それもその功成り名を遂げた晩年に会おうという事態は、まったく相手にされないというあしらいを受けることでもなければ、穏やかな成り行きで済ませられそうもないことは容易に想像されることである。ちなみにゲーテは 74 歳であった。ゲーテの壮年期に生きたヘルダーリンやクライストという激しい個性の場合は、ゲーテとのまともな文学的邂逅すら遂げていない。もちろん若きエッカーマンがゲーテと張り合おうなどと考えることは思いも及ばなかったことに違いない。かれが、ヘルダーリンやクライストのようなとびぬけた才能と意欲を持っていなかったといえればそれまでだが、このことはしかし、かれにとって不利益になるどころか、却ってその才能を開花させたともいえるのである。

それは、かれのゲーテに対するひたすらな賛仰と敬愛の念の賜物である。自分の文学的試みを全くあきらめたわけではないにしても、勇を奮ってワイマールへ赴きゲーテの家の扉を叩いて以来、ゲーテに対する尊敬の気持ちには些かの揺らぎもないばかりか、高まる一方である。それは、かれに対する謙譲の姿勢となってその最期の時まで持続している。それはまた、ゲーテの言動を細大漏らさず忠実に受け止め記録する

ことに結実している。このような受動的あるいは受容的な姿勢こそドイツ文学史上稀有な業績を生み出すもととなったものであることに疑いはない。世に能動的才能の開花はいくらでも例をあげることができるだろう。自分を表出することは能動的行為そのものだからだ。典型的な例は他を探すまでもない。ゲーテがそうである。

だが、近代の啓蒙主義の洗礼を受けた人々にとってこの受容に徹するという態度はなかなか採れるものではなかろう。しかも、それを自分が生きるための指針とするというのがエッカーマンの決断である。詩人あるいは画家エッカーマンを我々は知らないが、ゲーテの談話の相手としての文学上の業績はそれを補っても余りあるものがある。エッカーマンはその生まれも育ちも貧しさと切っても切り離せないこともあってか、あるいはその才能のありようが根本から違うためか、イエーナに依拠していた同時代のロマン派の若き俊秀たちとは全く違う世界への対し方を保っていた。ゲーテの勧めもあり時にはイエーナに行くこともあったにしても、ワイマールからさほど離れてはいないイエーナのロマン派の今を時めく詩人たちと交わることもなく、ましてやかれらから声をかけられるようなきらびやかな存在ではなかったのだ。彼を時代から埋没させなかった要因は、もちろん精神の能動性ではなかった。それはかえってその稀薄性にあったのかもしれない。それにかれ自身のゲーテに対する畏敬の念の深さと親和力が大きく作用しているはずである。かれは自分のうちにあるかれなりの創作への衝動を抑えてもゲーテに献身的に奉仕するのである。これは驚くべき決断なのだ。このような一途の受動的な姿勢がゲーテの心の琴線に触れ、両者の間に共鳴が生じたのかもしれない。

エッカーマンが、自分の詩集をゲーテに贈呈し、望外のことであったろうが、それにゲーテが些かの関心を持ってくれ、ワイマールを訪れるように誘ってくれたからといても、この出会いがのちに談話篇に結実するなど思いもよらぬことだったであろう。じじつ、かれはひとまず憧れの詩人に挨拶をして、その足で年来の望みを果たすべく、ライン地方

探訪の旅に向かう予定であった。ところが、挨拶が終わるや、かれはゲーテによってかなり強力にワイマールに引き留められてしまう。大変な勇気を奮ってゲーテ家の扉を叩いたかれは、いともあっさりと迎え入れられ歓待されているのである。また、かれがゲーテ家の内側の人となった急展開にも驚かされる。改めて驚きを禁じ得ない。

3.

イエーナに居場所をもつロマン派の面々だけではなく、ハイネに至るまで、ゲーテに対してはアンビヴァレントな感情を抱いていたことを考えれば、ゲーテより若い世代がゲーテという存在の巨大さに圧倒されるがゆえに、かれに反発を覚えるのは自然な道理である。ゲーテはかれらにとってじつに煙たい存在なのだ。だから、かれらとゲーテの出会いという契機は、エッカーマンがこの邂逅で経験したようなわだかまりのない、あっさりした、しかもねんごろなものにはなりえなかったであろう。いくら文学サークルを作っても、自分で自らの世界を構築するというような強烈な意識をもつ若いロマン派の俊英たちは、その意識の強さゆえに、自然に対しても、また人間に関する偉大なものに対しても寛容ではありえなかったのであろう。自己確立を目指すためには、世界を受容するよりもそれを排除するという心理的機制が働いてしまうのである。このような志向性は初期ロマン派が思想的支柱と仰いでいた哲学者フィヒテの絶対自我という観念に極まる。ここには、世界の真実を求めていたはずの精神から世界そのものが排除されるという逆説さえ見られるのである。

この意味で、エッカーマンはロマン派の詩人たちとは異なる。エッカーマンがかれらほど強い文学上の意欲を持っていなかったともいえるのは確かであろう。かれは素朴なのである。しかし、その素朴さは注目すべき特質を備えている。それは、ゲーテの盟友シラーがゲーテを念頭に置いて執筆した文学論『素朴文学と情感文学』で論じられている意味で

の素朴さに通じるものである。人の内界と外界にある自然に忠実に即し、それに自らを最大限に開いている姿勢をもち、それを豊かに受容することで文学としての表現世界を積極的に実現していく原理をいうのである。精神と情感の人シラーが自分の対極的ありようと位置付ける世界の特質である。その意味で、シラーにとってゲーテは、間違いなく無二の盟友ではあるが、文学の世界では好敵手であって、対立者でもあったといえよう。この二人によって築き上げられたドイツ古典主義文学とは、自然と精神の協同作業といってもよいのだが、自然と精神の対立と相克から造形されたものであることに注意するべきである。エッカーマンは明らかにゲーテの側に寄り添っていたのである。

エッカーマンがゲーテのもとに赴いたのは、1823年のことで、シラーが死去してから18年も経ってからだが、ドイツの古典主義も過去のものとなり、すでにロマン主義の盛期にあった。ロマン派の精神的な系譜は、ワイマールに君臨していたゲーテではなく、その時にはもはや存在しなかったシラーを源泉として山脈のように連なっているのである。その意味でゲーテは孤立していたのであり、ドイツ古典主義は少なくともこの時期には、ゲーテただ一人によって担われていたといってもよいのである。のちにムージルが、近代のドイツ文学がゲーテによって一挙に高められたが、その後のドイツ文学はその重圧に苦しんだという認識を示しているが、このことと照らし合わせればそれは蓋し至当な指摘であろう。しかし、エッカーマンはこの苦悩と栄光の山脈とは関わりを持たない。

そのゲーテに心酔するエッカーマンは、確かにロマン派の俊英たちと比肩するほどの文学的器量を持ち合わせた存在ではなかったかもしれないが、そのことよりもむしろ彼が古典主義的な世界観の持ち主であったことを重要視すべきではないかと思われる。全く役割は異なるが、ゲーテの古典主義の世界にエッカーマンはその点で初めから親和性を持っていたといえるだろう。エッカーマンとゲーテの相性が悪いわけではないのである。ゲーテはエッカーマンの性向を直観的に見抜いていたのであ

う。エッカーマンが勇を奮ってゲーテを訪ねた時、かれが驚くほどやさしく迎え入れられているのは、こういう共通項があるためであろう。おそらくゲーテはエッカーマンに自分に素直に寄り添う忠実で謙虚な話し相手を見出したのだろうが、それは例えば秘書のようなただの主従関係ではなく、このような古典主義的な世界という共通の精神的基盤を共有していたというのがこの深層ではなかったかと思われる。

4.

他方ゲーテのほうもこの同志ともいえるエッカーマンを身から手放そうとはしない。エッカーマンにもそれなりの事情はあった。ハノーヴァーに婚約者がいたし、かれなりの文学的野心もあるし、金銭的な生活上の問題もある。かれはそのような悩みをあえてゲーテに打ち明けることも時にはあるのだが、ゲーテのほうは、そういう折にはきまって機嫌が悪くなる。このように忠実な相手の存在はかれにとって時とともに分身に近い不可欠のものとなったのだ。ことは、単なる人間同士の相性の問題にとどまるものではない。ゲーテは、次第にエッカーマンがいなければ自分の仕事ができなくなるほどだったのだ。その仕事というのは、非常に多岐にわたる。

1823年当時、ゲーテの『ファウスト第二部』は未完のままに置かれていた。この作品を完成させるための強力な推進力になったのがエッカーマンであるし、ゲーテ自身が書き継いでいた自伝『詩と真実』も、かれの人生そのものを反映するので、少しずつ進行していくが滞りがちであったのだが、これを先へと導く一助となったのもエッカーマンの励ましである。

これらのことがらは詩人ゲーテのまさに作品そのものにかかわるものであるが、当時としてはまだ出来立ての『マリーエンバートの悲歌』などゲーテがその原稿をエッカーマンに見せて、その反応を窺っているようなところも散見される。また以前の自作の原稿を見せたり、朗読し

て聞かせたりもしている。ゲーテは、そのような折、自作に関する背景の説明や批評をしていることも少なくない。このようなゲーテに対してエッカーマンは、やはり基本的に聞き手であり、素直に感心していることが多い。しかし、そのかれも単なる受け身の存在ではないのだ。かれがゲーテを相手に進んで自らの見解を披露することは少ないし、ましてや批判的な言辭を弄することはないが、ゲーテその人からかれの可能性をさらに引き出す触媒のような働きをしている様子が随所にみられるのである。音楽でいえば対位法とはいえないが、二重奏の楽曲の伴奏部分をエッカーマン受け持っているかのようなようである。ゲーテを音楽に譬えるならば、それは孤独な無伴奏の演奏の世界ではなく、合奏と共鳴の世界である。このような境地では、伴奏者も音楽の全体を作り上げる不可欠の存在である。それも、それが単に主旋律の増幅や強化ではなく、主題の深部を引き出すのに成功しているのである。

そして、注目すべき点は、ゲーテの語りが生きたものとして再現されているということだ。ここでは、ゲーテにとって言葉の語りを書き言葉に劣らぬ芸術作品であったことがわかる。それは、ゲーテの生活の一端だといえは確かにそうであるが、さらにゲーテにとって生活そのものが芸術だったと言うべきであろう。文学や芸術に対する近代的な世界観、すなわちそれらを実生活から切り離して特別な領域としてとらえ、そのさいに生活そのものを無視しないまでも、俗界というような一段低い位置づけに置くという見方、ましてや芸術至上主義という世界とは全く違う世界に生きていたのである。この観点から見れば、ゲーテが晩年、ロマン主義から世紀末芸術にいたる近代主義の主流において孤立していたのもうなずけることであろう。その意味で、ゲーテの生のささやかな一部に過ぎないものかもしれないが、その生活をうかがわせてくれるエッカーマンの記述は誠に貴重なものである。

ゲーテはかつての盟友シラーとはその友情の関係性において全く異なるが、心おきなく自分の世界を披歴することができる話し相手を得て、水を得た魚のように語るのであった。そのシラーとの関係は偉大な友情

関係でもあったが、同時に緊張と相互的な切磋琢磨の場でもあったのに対して、エッカーマンはゲーテにとって自分をゆったりと受け入れてくれる真の聞き手であり触媒のごとき存在であった。エッカーマンという触媒を得て、ゲーテの精神は活発に展開する。この語りの世界が、ある意味で書かれた作品よりもゲーテの世界の豊かさや多様さを生き生きと伝えてくれる。その様子は、まさに百花繚乱といっても過言ではない。

5.

実はこのような多彩さと豊かさは、まさにゲーテの世界の特質であって、この談話の数々はそれを忠実に反映しているのである。したがって、いくら粘り強く取り組もうとしても、この大部な談話を、内容に従って論理的に整理することは極めて困難であり、またゲーテのその世界を原理的に裏切ることにもなりかねないので不可能であるかもしれない。随所でゲーテがその場で思いついたことを気ままに発言しているように見えるかもしれないが、実はそのほとんどは、かれの内心から出てきたものであって、とるに足らないものなど一つもないといっても構わないのである。

ゲーテの内心というか内面は、一つの宇宙であって、それを取り囲む大宇宙と絶えず交感しあっているのであろう。ゲーテという一個人間として捉えてみても、それが宇宙であるからには、近代の知性の精神の世界に収まるものではない。

近代の知性は、自己の精神に圧倒的な比重をかけている。フィヒテの絶対自我という概念などその典型的な例である。そこでは客体が消滅する危険性さえ内在している。また、ヘーゲルの弁証法も、世界の総合的把握を目指すのであろうが、つまるところ世界は精神へと取り込まれそこに収斂してしまう。この点で、ゲーテの哲学嫌いは際立っている。

ゲーテは、ロマン派が煙たく思うほど気難しくはない。ゲーテのもとを訪れるいわゆるワイマール詣では、ドイツの内外から引きも切らな

かった。気難しいのはむしろ自分の世界の自立性を主張してやまないロマン派の若い世代のほうであった。また、ゲーテにとって他者の存在は、宇宙に接するための窓口であって極めて貴重な機会であった。このような意味でゲーテを社交の人と呼んでも構わないであろう。かれの膨大な詩作のうちに注目すべきジャンルがあることを忘れてはならない。それは、機会詩と呼ばれている詩作群である。それは漢詩などにも窺える実に様々な人々や物との出会いを詩作に契機として生かすことによって作られた詩のことである。これらは、現実的な契機を基にしていて、一種記録といってもよいような性格を持っている。突き詰めていけば、生きている一瞬一瞬が詩作の可能性に満ちているということである。その基盤を形作る人々との出会いや自然との親和性は、生活そのものでもあるが、それらは同時に詩作の世界のことでもあったのだ。

このような世界の住人であるゲーテは、外界に対して概して寛大であった。大方の人は友好的に迎えられたり、褒められたりしているのである。ゲーテの誉め言葉はあまりにも普通のことなので、文字通り社交辞令と受け取られたこともあるようである。しかし、他者に対して概して好意的な評価を与えているのは事実だとしても、それがうわべだけのものとは思えない。これは、人の積極的な面に目を向けようというかれ自身の開かれた態度の表れということではないかと思われる。もし社交というのなら、このような開かれた姿勢をいうのではなからうか。

6.

このような開かれた姿勢は、自然現象に対しても見られることである。ゲーテの関心も行動も非常に多岐にわたる。だがそれゆえに、ゲーテという人をそれによって特徴づけることは決して容易ではない。ゲーテが詩人だというのは当然のこととしても、文学者として詩作のみならず、小説、戯曲、批評など文学のほとんどあらゆる分野を極めていいる。芸術分野では、造形芸術、なかんずく絵画に対する関心には並み並みならぬ

ものがある。かれはある時までには画家として立とうとしていたこともあるほどである。また、シラーとともに宮廷劇場の運営をもまかされていた。さらにワイマールの宮廷では、政治の実務を執っている。その一環として鉱山経営にも携わっている。

そして、驚くべき多様なゲーテの活動分野、あるいは彼の関心分野のなかでも自然科学の分野を無視することはできない。これはゲーテにとって甚だ問題的分野である。ここには彼の自負もある一方、世間それも専門家の間での評価は、ほかの分野に比して無視されたに等しいからである。しかし、このことをよく考えてみれば、そこには決して看過できない落差があることがわかる。ゲーテがいくら自負しようが、現代にいたる近代の自然科学はゲーテとは全く別の道をたどったのだ。ゲーテが特に色彩論において反発の感情をあらわにしているのは、物理学者ニュートンに対してである。その後の科学の歩みは、まさにニュートン力学の上に築かれていく。ゲーテの対ニュートンに対する戦いはとりあえず時代的には敗北に終わったことは確かなことだ。しかし、ゲーテの方法論を考えてみれば、その落差はより明らかになることだろう。

ゲーテの自然現象を見る目は、徹頭徹尾観察者の目である。理論や抽象論ははるかかなたにある。かれは、もっぱら現象そのものに心惹かれるのである。その観察は詳細である。特にそれが身の回りの動物や植物の場合、目覚ましい。たとえば、1830年8月2日の日付の記事はどうだろうか。

エッカーマンがフランス、パリの7月革命勃発のことをいち早くゲーテに知らせるべく興奮して駆けつけると、ゲーテのほうも何やら大変な事態に直面したと応ずるものだから、この附合は冗談話のような感がある。なぜなら、ゲーテにとっての大事件というのは、革命騒ぎの渦中であって、パリのアカデミー・フランセーズで、満員の聴衆を前にキュヴィエとジョフロア・ド・サンティエールの間で交わされたゲーテにとってはまさに革命的な生物学上の論争のことだったのだから。しかも、ゲーテがこの論争においてサンティエールに感心している点は、分析で

はなく総合的な自然研究法が勝利を取めたことにあるのだ。かれは、次のように語っている。

我々が分析的な方法で単に個々別々の物質の一部だけを研究しても、それに方向性を与え、内在する法則によっていかに桁外れなものでも受け入れる精神の息吹がなければ、いくら自然と親しんでも結局何にもならない。(1830年8月2日 原書750ページ)²

ここには、自然現象に謙虚に向き合いそれを総体的に受け入れる観察者の精神が要請されているのである。少なくとも人事は遠い世界にあることは、確かであろう。これには、エッカーマンもさぞ驚いたことだろう。しかし、エッカーマンはゲーテに深く共鳴しており、感銘を受けている。かれはゲーテの、陣営の人間であることに間違いはない。そのことはゲーテも承知しているので、安んじて本心を打ち明けることができるのであろう。もちろんこの談話篇は、ゲーテの死後、エッカーマンが編集したもので、かれの編集者としての立場での改変も脚色もあるだろう。だが、逆にそれでこそゲーテのありようは一層明確になるといってもよい。それほどにもエッカーマンはゲーテの世界と深く共鳴しているととらえるべきであろう。

しかし、ゲーテの自然研究は、近代の学問や科学の世界には、本格的に取り入れられることなく、歴史の中で埋没してしまうのである。これはゲーテというよりも近代という時代の問題である。そこでの方法は分析と抽象である。ゲーテはそのような方法論に原理的な疑いを持っていたのだ。あるいは、それはかれの生理的な反発であったともいえるかもしれないほど根深いものである。どうもこの辺りのことは、かれのその場での直接的な反応の在り方からしても、頭で考えた結果とは思われない。だが、その方が、かえってより深い発想といえるであろう。

ゲーテの自然観察は、一見雑然と存在していると思われる現象世界を捨象することなく、総体として受け入れるということの特徴としてい

る。おそらくこれは今日複雑系とか生態系と呼ばれる自然界の把握につながる志向性を持っている。『ファウスト』が求めるこの世を統べる真実というものもこういうものかもしれない。そうであるならば、彼は、世界をあるがままに受け入れ世界の隅々まで遍歴を続けなければならない。その背後に何があるのか、あるいはそれを支えているのは一体何かというような問いに対して答えようとするならば、究極的には神ということはいわざるを得なくなるのではないか。自然界の多様性、豊饒さを前にした時のゲーテの好奇心は、極めて敬虔かつ謙虚である。ゲーテ以後の近代という時代は明らかに啓蒙主義の落とし子としての知性主義とでもいえるような知性偏重の道をたどるとともに、ゲーテにおいてみられるような自然に対する全体的総合的な見方と自然現象をそのものとして見、受け入れるという謙虚さを失ったのである。この世界観は、ある意味でフィヒテの主張した絶対自我の後の姿なのかもしれない。それほどにも人間中心的な、理性中心的な捉え方である。ゲーテはこのような流れの中でひととき異彩を放っていたといってもよいだろう。

7.

エッカーマンは、ゲーテの自然把握を明確に、また生き生きと伝えている。これはやはりかれのゲーテに対する心からの共感の表れだろう。ゲーテの姿を伝えるエッカーマンが自然に対して同じような態度を持っていたことは随所にうかがえるが、そのなかでもひとときわかれの面目躍如というところがうかがえる箇所がある。それは、かれがゲーテに向かって得意な鳥の話をする件である。自然界のあらゆるものに関心を寄せていたといってもよいゲーテではあったが、こと鳥類に関してはその観察の細やかさと知識の豊富さという点でエッカーマンのほうがゲーテを上回る知見を持っていたことに疑いはない。この場面で、ゲーテは立場を変えてひたすら聞き手の役に徹している。このような場合のゲーテは潔いというほど謙虚だ。ゲーテにとって、おそらく人事的な人の優

劣関係や上下関係よりもはるかに重要な物が物についての認識だったというべきであろう。この方が世界を豊かに受容することになるからである。

またこのようなことは、対象が自然現象である場合に限ることではない。これまた、エッカーマンの独壇場ともいべき話題になるが、弓の話がある。ここでもゲーテはエッカーマンに対して素材や形状や機能のことなど様々な質問をしながらも、披瀝される弓の世界に聞き入っているのである。この際、ためにゲーテが放った矢が家の軒に刺さったままに記念として残されたことなどゲーテの素朴な人柄を窺わせて実にほほえましい。

このような場面でのエッカーマンはさぞかし得意満面であったろう。このような話題ならば、人間関係の上下あるいは人の器量の優劣とはかわりなく好きなだけ談笑に興じることができるからである。エッカーマンがそのような人であったことは事実であるが、他方ゲーテがそのようなことを特に好む人であったことも強調しておきたい。これらの場面の描写もエッカーマンの脚色の手が加わっていることに疑いはないが、それは現実を真実ならしめるためのエッカーマンの「詩と真実」であったのだ。

ちなみに、この『ゲーテとの談話』の第三部は、エッカーマンと同じころワイマール公国の皇太子養育係として宮廷に伺候し、エッカーマンと同じくゲーテに傾倒していたソレから後年ゲーテの言行録を譲り受け、それを基にエッカーマンがゲーテとの談話として再構成したものが、ソレの記述にはその人柄の几帳面さは窺えても、潤いや豊さは感じられない。エッカーマンの手が加わることによって、ゲーテの世界は生氣を帯びるのである。

このエッカーマンがいなければ今日のゲーテ像も瘦せたものになっていたかもしれない。しかし、談話においてエッカーマンの存在がいかに大きなものであっても、エッカーマンの名も談話においてゲーテとの関連で残っているのであり、主題と主人公は何といてもゲーテである。

談話の構成は、日録風のものだから、そこで一貫した主題を追求するわけでもないし、論理的に話の主題を並べたものでもない。誠に雑然としている。膨大な集積であるゲーテの若き頃の、そして壮年期のエピソード、過去に書かれたゲーテの作品群についての回顧及び解釈、ゲーテのもとを訪れたナポレオンのこと、イタリア紀行のころの美術体験、音楽界のこと、イギリス文学とりわけシェークスピア、同時代のスコットやバイロンについての見解、盟友シラーのこと、自然の中で風景について、自然科学の議論、特に色彩論をめぐる議論、演劇活動と劇場のこと、デモーニッシュなものという概念の提示等々枚挙にいとまないほど様々な話題が展開されている。しかも、それらが無造作に並べられているという趣がある。

様々な対象の多様性と豊饒さには驚きを禁じ得ないが、その一見すると無秩序な配置や秩序の辿りにくさこそがかえってその豊かさを表しているといえよう。これはゲーテという複雑系の宇宙を物語るものに他ならない。もちろんすべての切り口はゲーテという人に収斂している。ゲーテという人格は一つの宇宙であるとともに、大宇宙との接点でもあるのだ。

この点で、エッカーマンは少なくともゲーテ晩年の八年間は、少なくともその幾多の接点を共有し、その宇宙を幾分なりとも共に生きたといえるのではないか。この談話は、その意味で稀有な魂の交流の記録でもあったのだ。しかも、その世界は広く開放されているので、我々もそれに与ることができるのである。その意味でもこの談話は、ゲーテを代表するかれ自身の作品といってもよいのである。だから、ニーチェのこの本に与えた最高の賛辞は、この書物の特筆を過不足なくとらえているといえるのである。すなわち、「ゲーテの書いた物を除外したら、とりわけこの世に存在するドイツ語で書かれた最高の書物であるゲーテのエッカーマンとの談話を除いたら、一体ドイツの散文文学のうちで、繰り返し何度も読むに値する物で何が残るだろうか。」ここに述べられている事柄のなかでも、特に「ゲーテのエッカーマンとの談話」という紹介の

仕方に論者は感嘆を禁じ得ないのである。この書物は、エッカーマン作の『エッカーマンのゲーテとの対話』であるとともに、あるいはそれ以上にゲーテ原作、エッカーマン脚色による『ゲーテのエッカーマンとの談話』なのだ。

注

- 1 Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe Band 2 1980 München S.599
- 2 エッカーマン著『ゲーテとの会話』1830年8月2日の記述
Johann Peter Eckermann : Gespräche mit Goethe 1976 München S.750

